

### 経営学部留学生の専門書読解に関する調査研究：主な困難点と、読解ストラテジー行使の実態

小宮，修太郎

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

95

(開始ページ / Start Page)

239

(終了ページ / End Page)

264

(発行年 / Year)

1996-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004763>

# 経営学部留学生の専門書読解に関する調査研究

## —主な困難点と、読解ストラテジー行使の実態—

小 宮 修太郎

### 1. はじめに

95年7月から8月にかけて、法政大学経営学部に在学中の外国人留学生を対象に、専門書の読解に関する調査を行った。この調査の目的は、外国人留学生が専門書を読むときに①どんなことが読解を難しくする要因だと感じているか、②どのような読解ストラテジーを行使しながら読んでいるか、を知ることにあった。調査の方法は、留学生が実際に専門書の一部を読んでいく過程を記録し、最後に面接とアンケートによって各人の文章理解の結果や読解ストラテジーの行使状況を調べるというものであった。この方法にしたのは、単なるアンケート調査よりも、学習者の読解ストラテジー行使の実態を具体的かつリアルに把握できると考えたからである。

### 2. 調査の対象、方法、内容について

調査の対象となったのは、経営学部留学生の31名で、うち2年生21名、3年生6名、4年生4名である。学年別割合で2年生が多くなっているのは、第2学年は、一般教養的な勉強から専門分野の勉強への過渡期で、とくに専門読解の面で困難さを感じやすい時期であると考えて、今回の調査の主な対象にしたいと思ったからである。国籍別内訳では、中国13名、韓国8名、台湾5名、香港1名、インドネシア1名、マレーシア2名、バングラデシュ1名である。対象者全員がアジア系留学生で、漢字圏・非漢字圏に分ければ、漢字圏の留学生の割合が多い。

調査では、まず、学習者に「日本的経営論」に関する専門書の一部（約5

ページ分)を読ませ、その中で①1区切り(文章を4つの部分に区切っておいた)毎に、意識の中にあることを独話の形で録音する、②1区切り毎に、読解のための補助的行動としてどのような作業をしたかを用紙に記入する、という2つのことをしてもらった。さらに、その後、③面接の形式で、文章の主な内容をまとめて説明させてから、教師の質問に答えさせる、④アンケートの形式で「専門書を読むとき読解の困難さを生じる要因は何か」「専門書を読むとき、どんな読み方の工夫をしているか」などの質問に答えさせる、という形で調査を行った。また、学習者の予備知識の程度を知るために、簡単なアンケート調査を事前に行った。

読解の素材となった文章は『組織の理論と日本的経営』(植村省三著)の第1章第3節「日本的経営論の吟味と批判」の「1」と「3」をつなぎ、一部分を削除したものである。「1」では、これまでの日本的経営論の「吟味と批判」をしていく上での著者の視点、「3」では、間宏氏の日本的経営論に対する著者の批判が展開されている。

学説の批判が主な内容であるだけに、「抽象的な語、表現も用いた議論が多い」「専門用語が説明抜きで使われることが多い」「論理展開に複雑さの感じられる部分がある」などの特徴を持った文章になっている。この文章を選んだ理由は、1つは、「日本的経営論」という、多くの留学生にとって関心度が高い分野のものであること、2つ目は、2年生にとっては適度に難しい文章なので、「各自にとっての困難点」「それを解決するための読解ストラテジーの使用」などが把握しやすいと予想されたことである。実際の調査における学習者の反応からも、これらの予想は当たっていたことが確認できたと思う。

### 3. 「専門読解の主な困難化要因」に関するアンケート調査の結果

ここで「困難化要因」と呼ぶのは、言い換えれば「文章理解を進める上で困難さを生じる主な要因となったこと」である。例えば、非漢字圏の学習者にとっては「漢字の読み方が分からず、辞書が引きにくいこと」によって、文章がスムーズに理解にくくなることもありうる。留学生が専門書を読む場合には、どんなことが主な困難化要因(以下、「困難点」と呼ぶ)になっているかを調べるのが、ここでの目的である。

この点についての調査は、前記の文章を読ませた上で、アンケート形式で

「今回の文章を読む中で、困難さの要因になったのは、次のうちのどれか」および「ふだん専門書を読む中で、困難さの要因になっているのはどれか」を選択肢 14 項目の中から複数回答で選ばせることにより行われた。

その全体的な集計の結果は表 1 のようになった。

この表を見ると、今回の文章については、①「学者や、学説をよく知らない」(21 人)、②「専門用語の意味がよくわからない」(14 人)の 2 つが主な困難点だと感じられたことがわかる。また、③「意味がよくわからない文がある」(12 人)もかなりの学習者が困難点としてあげている。これについては、どうして「わからない」のかという問題があるが、今回の文章では、何らかの背景知識の欠如と関連している場合が多かったようである。その他には、文章レベルでの難しさを主な要因にあげた学習者も多かった。また、社会常識や歴史など具体的事柄についての知識の欠如を主な要因として選んだ学習者も多かった。

ふだん専門書を読むときの困難点の集計結果を見ると、若干の順位変動が見られる。最も多くの学習者があげているのは、①専門用語の意味 (17 人) ②歴史的事実とか、具体的事柄の知識 (15 人) ③学者や、学説の知識 (14 人) である。

表 1 文章理解を進める上での「主な困難点は何か」への回答集計

| 困難点の選択肢                         | 今回   | 通常   |
|---------------------------------|------|------|
| a. 漢字が読めないため、すぐ辞書が引けない。         | 5 人  | 2 人  |
| b. 単語の意味がわからない。                 | 4 人  | 2 人  |
| c. 慣用句、ことわざなどの表現がわからない。         | 3 人  | 6 人  |
| d. 専門用語の意味がわからない。               | 14 人 | 17 人 |
| e. 文法的にわからない文がある。               | 1 人  | 3 人  |
| f. 意味がよくわからない文がある。              | 12 人 | 10 人 |
| g. 文章の論理展開がつかみにくい。              | 9 人  | 10 人 |
| h. 読むのに時間がかかるため、全体像がなかなかつかめない。  | 9 人  | 3 人  |
| i. 文章の背景にある社会常識のようなものを知らない。     | 9 人  | 5 人  |
| j. 文章の中に出てくる歴史的事実とか、具体的事柄を知らない。 | 9 人  | 15 人 |
| k. 議論の対象となっている学者や、学説をよく知らない。    | 21 人 | 14 人 |
| l. 著者の文章の意図や、真意がつかみにくい。         | 9 人  | 4 人  |
| m. その他【※】                       | 3 人  | 3 人  |

※の中身は「今回」が「時間の問題」「人名がわからない」など。「通常」が、「日本語の遠回しの意味」「文章が難しくて、長すぎる」など。

これらに次いで、④意味がわからない文（10人）⑤文章の論理展開（10人）などをあげている学習者が多い。また、少数ではあるが、⑥慣用句、ことわざ（6人）⑦社会常識（5人）などを選んだ学習者もいた。

全体的に見ると、ふだんの専門読解の困難点については、次のような傾向が見られる。

まず、「専門用語」の使用によって難しくなっていると感じている一方、「何らかの背景知識の欠如」も大きな問題として感じられていることである。その知識の領域は、1つは日本の歴史、そして、おそらく政治、経済、社会などの領域における具体的事柄についての知識である。その知識の多くは、日本人にとっては、一般常識として共有されているものかもしれない。もう1つは、専門分野の学説、学者などについての知識である。前者とは、領域もレベルも異なるが、どちらも知的な領域の知識であり、日本に来てはじめて蓄積されていく知識であるという共通点を持っている。

その一方、対象となった学習者たちに関する限り、「文字」「単語」「文法」など一般的な日本語教育で扱われる領域の問題は、あまり、困難点として意識されていない傾向がうかがえる。しかしながら、それとは別に、単語、文、文章の各レベルで「専門用語」、「意味のわからない文」、「文章の論理展開」などの要因はかなり多くの学習者が困難点としてあげており、これらの問題が、「背景知識の不足、欠如」と相まって、文章を理解しにくくさせているものと思われる。

次に、学年別の集計をしてみると、表2のようになる。

この表を見ると、学年が上がるにつれて、一般的な日本語能力に関わる項目は、あまり困難化の要因として意識されなくなり、「専門用語」とか「歴史的事実」とか「学者、学説」など知識面に関連する項目にしばられていく傾向があることがわかる。

ということは、こうした領域の知識の不足が、留学生の場合には長く問題点であり続けることを意味する。これらの知識のうち、「専門用語」や「学者、学説」は各自が専門分野の勉強の中で獲得し、蓄積していくべきものであるが、「歴史的事実とか、具体的事柄」というのは、どのようにして習得したらいいのかが問題になると思われる。というのは、多くの留学生の場合、来日の時点では日本の歴史、政治、経済、社会、文化等についての具体的知識が著しく乏しいこと、来日後の予備教育の段階でもごく大まかな知識しか与えられな

表2 学年別の、専門書の文章理解を進める上での困難点(通常)の回答集計

| 困難点の選択肢                         | 2年    | 3年  | 4年  |
|---------------------------------|-------|-----|-----|
| a. 漢字が読めないため、すぐ辞書が引けない。         | 1/21  | 0   | 1/4 |
| b. 単語の意味がわからない。                 | 2/21  | 0   | 0   |
| c. 慣用句、ことわざなどの表現がわからない。         | 5/21  | 1/6 | 0   |
| d. 専門用語の意味がわからない。               | 11/21 | 4/6 | 2/4 |
| e. 文法的にわからない文がある。               | 3/21  | 0   | 0   |
| f. 意味がよくわからない文がある。              | 8/21  | 2/6 | 0   |
| g. 文章の論理展開がつかみにくい。              | 8/21  | 1/6 | 1/4 |
| h. 読むのに時間がかかるため、全体像がなかなかつかめない。  | 2/21  | 1/6 | 0   |
| i. 文章の背景にある社会常識のようなものを知らない。     | 3/21  | 1/6 | 1/4 |
| j. 文章の中に出てくる歴史的事実とか、具体的事柄を知らない。 | 9/21  | 5/6 | 1/4 |
| k. 議論の対象となっている学者や、学説をよく知らない。    | 8/21  | 4/6 | 2/4 |
| l. 著者の文章の意図や、真意がつかみにくい。         | 4/21  | 0   | 0   |
| m. その他                          | 2/21  | 0   | 1/4 |

(注. 数字の分母は学年別の総人数, 分子はその項目を選んだ人数)

いことによって、日本人学生に比べてそれらの知識がはるかに少ない状態で大学の授業に臨まざるをえなくなるからである。その後も、このギャップを埋めるための機会は限られているものと思われる。したがって、留学生教育の中では、こうした領域の知識をいかに習得、蓄積させていくのかが、1つの重要な課題になっていると言える。

#### 4. 学習者の読解ストラテジー行使の実態に関するアンケート調査の結果

今回のアンケート調査の中で、読解ストラテジー行使に関する項目は2つあった。1つは「専門読解のとき、読み方で工夫し、実行していることは何か」、もう1つは「専門読解のときの困難点を解決するために、どんな行動をとっているか」である。

##### 4.1 「読み方で工夫し、実行していることは何か」への回答の集計結果から

この項目への回答に現れた読解ストラテジーを分類し、集計すると、表3のようになった。

表3 アンケート調査の回答に見る読解ストラテジーの種類別行使状況（複数回答）

| 読解ストラテジーの種類                                          | 人数     |
|------------------------------------------------------|--------|
| 1. 下線, マークの使用……………                                   | 計 21 人 |
| ① アンダーライン……………                                       | 19 人   |
| ② 区切りのマーク……………                                       | 1 人    |
| ③ 疑問の箇所に「？」マーク……………                                  | 1 人    |
| ④ 不明の語にマーク……………                                      | 1 人    |
| 2. メモを取る……………                                        | 計 13 人 |
| ① 段落の要点をメモ……………                                      | 5 人    |
| ② 内容を要約する……………                                       | 3 人    |
| ③ メモをとりながら読む……………                                    | 2 人    |
| ④ 重要なところは余白にメモ……………                                  | 1 人    |
| ⑤ 思い出したことをノートにメモ……………                                | 1 人    |
| ⑥ 感想と意見を書く……………                                      | 1 人    |
| ⑦ 専門用語を記入する……………                                     | 1 人    |
| 3. 読解の作業過程に関する工夫……………                                | 計 10 人 |
| ① 全体像をつかんでから, 各部分を詳しく読む……………                         | 7 人    |
| ② 全体像をつかんでから, 各段落の要点をつかむ……………                        | 1 人    |
| ③ 何回もくり返して読む……………                                    | 3 人    |
| ④ 不明な箇所をくり返して読む……………                                 | 1 人    |
| ⑤ 不明な箇所があるとき, その段落の最初から読む……………                       | 1 人    |
| ⑥ 初めと終わりを読んでから, 中心部分を詳しく読む……………                      | 1 人    |
| ⑦ 重要な中心部分をじっくり読む。重要でない部分は簡単に……………                    | 1 人    |
| ⑧ 1 回目アンダーラインしながら読み, 2 回目は, メモして<br>内容をまとめながら読む…………… | 1 人    |
| 4. わからない単語, 事項, 文への対応……………                           | 計 10 人 |
| ① 辞書を調べる……………                                        | 6 人    |
| ② 推測する……………                                          | 1 人    |
| ③ 「現代用語の基礎知識」で調べる……………                               | 1 人    |
| ④ 外来語の専門用語は, 元の外国語を調べる……………                          | 1 人    |
| ⑤ 先輩に聞く……………                                         | 1 人    |
| ⑥ 専門用語を, ノートに記入する……………                               | 1 人    |
| 5. その他の読解ストラテジー……………                                 | 計 3 人  |
| ① 同じテーマの他の本を読む……………                                  | 3 人    |
| ② ノートに自分の感想と意見を書く……………                               | 1 人    |
| ③ 思い出したことをノートにメモ……………                                | 1 人    |

大きな分類項目で見ると、①アンダーライン、マークを付ける（21人）の他に、②メモをとる（13人）が多いことが目につく。また、③読解の作業過程に関する工夫（10人）④不明な語や文への対応（10人）も、それぞれ3分の1の学習者が記入していた。以下、項目毎に観察、分析の結果などを記しておく。

まず、「下線、マークの使用」について。回収された文書コピーを見ると、学習者によっては、アンダーラインの他にも、いくつかのマークが使われている場合がある。とくに多いのは、キーワードを四角で囲んでいるものである。他に、文章の論理展開をつかむために、小さな区切りを示す斜線を入れているものなどもあり、マーク、下線の使用はそれぞれの読解ストラテジーを反映していることが感じられた。とくに重要だと思われたのは、各学習者がどんな部分、あるいは文に注目して下線を引いているかということである。というのは、個人別の下線の分布状況はその学習者の文章理解のアウトラインを表すと同時に、行使する読解ストラテジーの基本的な特徴も示しているからである。そこで、次節では、下線箇所の分析によって学習者の読解ストラテジーの行使実態を見ていくことにする。

次に「メモをとる」について。種類別に見ると、「段落の要点をメモ」「内容を要約する」など、『要約型』のメモとりを行っている人が多いことがわかる。この中には、「（文章の論理展開がつかみにくいとき）理論的な組み立てを記す」という、独自の読解ストラテジーを行使している人も含まれている。いずれの場合も、この種のメモとりが、文章理解のための重要な手段になっているのが感じられた。その他に、少数であるが、「重要なところをメモ」という『重点記録型』や「思い出したことをメモ」など『思考記録型』のメモとりを行っている人も見られた。

次に、「読解の作業過程に関する工夫」について。この項目の中では、「まず全体像をつかんでから、各部分を詳しく読む」という回答が多かった。つまり、トップダウンの読解ストラテジーを意識的に行使している人がかなりいることがわかる。しかし、後で詳しく見るように、この回答をした人たちの中でも、全体像を把握していくための具体的な手法は異なっており、その読解ストラテジーの発達には程度差が感じられた。したがって、これらの学習者は、全体としては、トップダウンの読解ストラテジー行使を「志向している」人たちと見ておくべきだと思われる。



その他に、「重要な部分をじっくり読む。重要でない部分は目を通すだけ」というストラテジーを中心にした独自の読み方を確立している学習者も見られた。また、「初めと終わりを読んでから中心部分を読む」という学習者もいた。

なお、この項目には分類しなかったが、「メモをとる」の中の「段落の要点をメモしながら読む」というのも、「読解の過程に関する工夫」に関連したものを見ることができる。というのは、これは文章の全体像をとらえていくためのボトムアップ的な手法にもなっているからである。個人別に見ても、このアンケートは複数回答方式であるにも関わらず、この回答と前記の「まず、全体像をつかむ」という回答が両方記入されている例は見られなかった。そのことから見ても、やはり、トップダウン志向か、ボトムアップ志向かという、読み方の違いとして捉えておくべきだと思われる。

最後に、「不明の単語、事柄、文への対応」および「その他の読解ストラテジー」について。これらは、いずれも、実際に行使している者のうち、ごく一部が記入したにすぎないと思われる項目である。前者の項目については、アンケートのもう1つの質問である「困難点を解決するための行動」に対する回答が、より包括的なものとして利用できる。また、後者の項目については、録音記録、行動記録の中に実際の行使のしかたを見ることができる。したがって、ここではとくにコメントはせず、次節以下で具体的にみていくことにする。

#### 4.2 「困難点を解決するための行動」への回答の集計結果から

アンケートでは、質問2で「ふだん専門書を読むとき、文章理解を困難にする主な要因は何か」と聞いた上で、質問3で「それらの問題を解決するために、どのような行動をとることが多いか」と聞いている。学習者たちが記入した回答を分類、整理すると表4のようになる。

表4 アンケートの質問「困難点を解決するための行動」への回答集計

| ① 語句レベルの困難点に対する対応                                                                                                     |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| a (漢 字): 漢和辞典 (1人)<br>b (単 語): 辞書 (3人) 何回も読み、文意をつかんでから辞書 (1人)<br>c (慣 用 句): 辞書 (4人) 人に聞く (1人)<br>d (専門用語): 専門の辞典 (7人) |

表 4 つづき

|                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ② 文レベルの困難点に対する対応                                                                                                                                                                                                                                    |
| e (文法的): 日本人に聞か、文法書 (1人)<br>f (意味不明): 人に聞く (1人) 日本人に聞く (1人) くり返し読む (1人)<br>専門の辞典を調べたり、時間をかけて何度も読む (1人)                                                                                                                                              |
| ③ 文章レベルの困難点に対する対応                                                                                                                                                                                                                                   |
| g (論理展開): くり返し読む (3人) 人に聞く (1人)<br>h (全体像): くり返し読む (1人) とりあえず読み通す (1人)                                                                                                                                                                              |
| ④ 知識量の不足に対する対応                                                                                                                                                                                                                                      |
| i (社会常識): 本 (1人) 社会常識の本 (1人) 何もしない (1人)<br>j (歴史など): 本 (1人) 辞典 (1人) 歴史の本 (1人) 参考書、著書 (2人)<br>先生に聞か、専門書 (1人) やむをえず飛ばす (1人)<br>何もしない (2人)<br>k (学者、学説): 本 (1人) 参考書、著書 (1人) 専門書、人物誌 (1人)<br>専門書 (1つの問題に関するさまざまな著作) を大量に読む (1人)<br>読み直す (1人) 何もしない (2人) |
| ⑤ 著者の真意がわからないときの対応                                                                                                                                                                                                                                  |
| l (真意不明): くり返し読む (2人) 専門書を大量に読む (1人)                                                                                                                                                                                                                |

以上の集計結果からわかるのは、次のようなことである。

- 1) 不明箇所を明らかにする解決行動としては、①語句レベルでは「辞書や辞典で調べる」、②文レベルでは「人に聞く」、③文章レベルでは「くり返し読む」がそれぞれ最も多い。④《著者の真意》に対しては、やはり「くり返し読む」が多い。
- 2) 《知識の欠如》による困難に対する解決行動としては、「何もしない」という消極派と、「関連の本を読む」などの行動をとる積極派に分かれているのが感じられる。後者の行動の中身としては、「人に聞く」よりも、「自分で直接調べてみる」という行動が多くとられていることがわかる。

## 5. 問題文章へのアンダーライン箇所の分析からわかること

### 5.1 下線箇所の分布状況が示すもの

学習者から回収した文章コピーのほとんど全部に、下線や、囲みのマークがつけられていた。今回の問題文章の場合、その下線箇所の分布状況には、学習者によってさまざまな差異が見られた。例えば、ある学習者は間宏氏の見解を著者が要約したり、説明したりしている箇所にのみ下線を引いているのに対し、他の学習者は著者の間宏氏に対する批判やコメントを述べている箇所に重点的に下線を引いている、というような差異もその1つである。また、ディスコース・マーカーの役割を持つ文によく下線を引く学習者と、それらには全然下線を引かない学習者、という差異も見られた。

次節で詳しく見るように、下線箇所の分布状況に見られるこれらの差異と、録音記録分析および面接回答分析に見られる差異の間には密接な対応関係がある。例えば、最初の例のような下線の引き方をした学習者は、録音記録等でも文章全体を間宏氏の見解の展開のような形でまとめた説明をしているのである。

したがって、下線の引き方には、その学習者の文章理解のアウトラインも現れると言えるし、さらに、次に述べるような意味で、学習者の読み方や読解ストラテジーのある側面も現れると言えるのである。

その側面の1つは、トップダウンの読解ストラテジーを行使しているかどうかの違いである。つまり、著者が「論点」を簡条書きで示した部分、あるいはディスコース・マーカー的な文または部分に注目するかどうかは、この差異を示す指標になる。また、「批判的読み」のストラテジーも、マークや、短いメモ書きの形で現れることがある。例えば、「？」のマークで著者の主張への疑問を示している場合とか、「筆者は……している」などの書き込みで著者の意図の推量を示している場合などが、それである。

さらに、「重要な部分」と「重要でない部分」を区別する読み方をしているかどうかでも下線の引き方に現れる。重要度をよく判断して前者の部分だけに適切に下線を引いている学習者もいれば、ほとんど全面的に下線を引いてしまう学習者もいる、というようにである。特に重要な差異は以上のような点であるが、他に、スキミングやスキニングなどの読み方、あるいは著者の人物像へ

の注目、キーワードへの注目なども下線、マークの分布から読み取れるのである。

## 5.2 下線箇所からわかるトップダウンの読解ストラテジーの行使実態

この節では、問題文章の下線箇所の分布状況を見るときに、学習者の「読解ストラテジーの発達を見る1つの尺度」ともなり、特に「トップダウンの読解ストラテジーの行使の指標」ともなるような3つの指標を選んで、学習者毎にそれぞれの有無あるいはその程度をチェックした集計結果を示しておく。その3つの指標というのは、

- ① 著者＝植村氏（U氏と略す）の批判やコメントに注目して、下線を引いているか。その程度は、どうか。
- ② ディスコース・マーカ―の文（DM文と略す）に注目して下線を引いているか。
- ③ 著者が論点をまとめて提示している部分（「論点」と略す）に注目して下線を引いているか。〔1〕の区切りにある2つと、〔4〕の区切りにある2つのうち、全部か、その一部か。

表5を見ると、この3つの指標だけに注目しても、いろいろな個人差が感じられる。

まず、「U氏への注目」であるが、「あり」に分類されたのが10人、「少」に分類されたのが10人、「なし」は6人となっている。他の指標に比べれば「あり」と「少」の合計が比較的多いが、文章の内容、目的を考えると、不十分な数字という感じがする。

次に「論点への注目」であるが、「あり」が12人、部分的なのが6人、「なし」が8人となっている。この読解ストラテジーは約6割が行使したにとどまっているのであるが、その実行のしやすさ、有意義性から見て、これも意外に少ない数字と感じられる。

最後に「ディスコース・マーカ―文への注目」は、さらに少数の者が行使したにとどまっている。すなわち、「あり」が10人、「少」が7人、「なし」が9人、という分布である。

個人別に見ていくと、3つの指標のうち2つ以上で「あり」になっているのは10人、1つ（または「少」2つ）にとどまっているのは10人、それ以下の者は6人となっている。以下においては、トップダウンの読解ストラテジーの

表5 下線箇所分析による学習者毎の「トップダウン」の行使状況

| 学習者番号              | U氏への注目 | 「論点」への注目 | DM文への注目 |
|--------------------|--------|----------|---------|
| 03, 05, 06, 08     | ○      | ○        | ○       |
| 01                 | ○      | ○        | 少       |
| 02                 | ○      | [4]のみ    | ○       |
| 04                 | ○      | ×        | ○       |
| 07                 | 少      | ○        | ○       |
| 10, 13             | ○      | ○        | ×       |
| 12, 17, 30         | 少      | ○        | 少       |
| 19, 27             | 少      | 少        | ○       |
| 11                 | 少      | ○        | ×       |
| 16                 | ○      | ×        | 少       |
| 22                 | 少      | 少        | ×       |
| 18                 | 少      | ×        | 少       |
| 15                 | ×      | ×        | ○       |
| 21                 | 少      | [1]のみ    | ×       |
| 20                 | ×      | [1]のみ    | ×       |
| 26                 | ×      | ×        | 少       |
| 23, 24, 29         | ×      | ×        | ×       |
| 09, 14, 25, 28, 31 | 下線記入なし |          |         |

(記号の○は「あり」、×は「なし」を示す)

行使の程度を示す意味で、上記の第1の程度を「積極的」、第2の程度を「中程度」、第3の程度を「消極的」としておく。他に、下線引きをしなかった者がいるが、これは「不明」と表示する。

## 6. 録音記録と面接結果にもとづく、学習者の読解ストラテジーの観察

### 6.1 各学習者の文章理解の結果に対する評価

5で見たように、下線箇所の分析からも、各人の読解ストラテジーの行使実

態の一側面がつかめるのであるが、録音記録と面接結果なども併せて見ていくと、それぞれの行使実態がより総合的に観察できる。ここでは、主な調査結果のみを報告するという目的から、いくつかのグループに分類して、その共通の特徴を述べるとともに、何人かの注目すべき学習者を取り上げて、その読み方を分析記述していくことにしたい。それらの記述に入る前に、まず、対象者全員について、文章理解の結果を成績評価し、集計した表があるので、それを提示しておく。成績評価は、A、B、C、D、の4ランクに分けて表示しているが、それぞれ次のような評価を意味している。

A ランク：この文章を大変よく理解している。

B ランク：だいたいよく理解しているが、部分的には問題がある。

C ランク：重要な点は何とかつかんでいるが、かなり歪みも見られる。

D ランク：ほとんど理解していないか、混乱しているか、大きく歪んでいるか、のいずれかである。

この総合的な評価を決めるにあたっては、次の5つの項目についての評価を判断材料として用いた。

- ① 中心的内容がよくつかめているか。
- ② 内容を、論理的に一貫した形で説明できたか。
- ③ その説明において、原文からの変形が少なかったかどうか。
- ④ 原文の文章の構成や、関係の枠組み（例、著者の考えと、間氏の見解の関係）が、きちんと把握されているか。
- ⑤ 文章の内容にもとづいて、自分の考えを述べることができたか。

表6 学習者の文章理解の結果に対する評価と、読み方の特徴

| 学習者番号  | 総合評価 | 録音記録に見られる特徴                          |
|--------|------|--------------------------------------|
| 01, 06 | A    | よく理解している一方、自分の考えも述べている。              |
| 02     | A    | 文章の全体像も細部も正確に理解している。                 |
| 05     | A    | 読解ストラテジーも、スキルもすぐれている。                |
| 07     | A    | 不明な箇所は「不明」としつつ、全体的によく理解している。         |
| 09     | A    | 4年生で、熟達した読み手。内容をよく理解して、論理的に再構成して見せた。 |
| 10, 11 | A    | 論理的に再構成しているが、部分的には原文とのずれが見られた。       |

表 6 つづき

| 学習者番号      | 総合評価 | 録音記録に見られる特徴                         |
|------------|------|-------------------------------------|
| 03, 04     | B    | 読解ストラテジーを駆使して、よくがんばった。              |
| 14, 15     | B    | おおづかみにポイントをおさえている。                  |
| 17, 20     | B    | 各部分の要点は正確におさえているが、全体の枠組みはあいまい。      |
| 21, 22     | B    | 自分なりに整理しているが、枠組みがあいまいで、細部の変形が見られた。  |
| 23         | C    | わかりにくい所を避け、わかる所だけをつないで理解。           |
| 08         | C    | 読解ストラテジーは行使しているが、今回の結果は良くなかった。      |
| 13, 16, 30 | C    | 枠組みがあいまいで、文章の変形も見られた。               |
| 18, 31     | C    | 枠組みはあるが、各部分の変形が目立つ。                 |
| 19         | C    | 4年生。自分の考えを述べることに熱心で、文章内容はかなり変形している。 |
| 12, 26     | D    | 読解能力がまだ劣るので、内容は良くわからなかった様子。         |
| 24         | D    | くり返し読んで自分なりに理解したと言うが、大幅な変形が見られた。    |
| 25         | D    | 4年生。自分の知識に関連づけて説明しているが、大幅に変形していた。   |
| 27         | D    | 努力はしたが、ほとんどわからなかった様子。               |
| 28         | D    | 大変難しく感じられた様子。読解の基礎的なスキルがまだ不十分。      |
| 29         | D    | 自分の考えを述べることに熱心。                     |

## 6.2 各ランクの学習者の読み方と、その結果

以下、この表の成績評価のランク毎に、その中に含まれる小グループについて、読み方の特徴と文章理解の結果を記述していくことにする。特徴的な読み方をした個人については、その読解ストラテジーを詳しく紹介する。

### 6.2.1 A ランクの学習者について

このランクの学習者には、読解能力の面で共通した特徴が見られる。それ

は、読解ストラテジーと読解スキルがともに発達していることである。また、批判的に読む力、考える力もあると思われる学習者が多かった。

下線箇所分布状況から見たトップダウンの読解ストラテジー行使との関係は、表7のような集計結果に現れている。

表7 Aランクの学習者の「トップダウン」の行使状況

| トップダウンの行使程度 | 学 習 者 番 号              | 合計人数 |
|-------------|------------------------|------|
| 積極的         | 01, 02, 05, 06, 07, 10 | 6人   |
| 中程度         | 11                     | 1人   |
| 消極的         | なし                     | 0人   |
| 不 明         | 09                     | 1人   |

表7に見るように、Aランクの学習者のほとんどがトップダウンの読解ストラテジーを良く行使している。各個人の読み方を総合的に見れば、それぞれ異なる特徴を持ついくつかの小グループに分けられるにも関わらず、この点では共通性が見られるということは、専門書読解におけるこの種の読解ストラテジーの重要性和有効性を示していると思われる。《11》、《09》の学習者はこの例にあてはまらないように見えるが、それぞれ独自の読解ストラテジーを発達させているのである。したがって、いずれにせよ、「読解ストラテジーの発達」と「専門読解における文章理解力の向上」との間には不可分の関係があることがわかる。

学年別に見ると、このランクには、2年生5人、3年生2人、4年生1人が含まれている。2年生と上級生の間には、かなり明瞭な差異が感じられるので、この両者は区別して扱うことにする。

まず、2年生の5人について。録音記録などの分析によって把握された共通点は、全員が前記のような内容のトップダウンのストラテジーをよく行使して、文章構成や関係の枠組みを適確に把握していることである。しかし、その中には、以下のような3つのタイプが見られた。第1は、文章の内容を理解することと、批判的に読むことが、並行して行われていた学習者たち。第2は、文章内容を正確に理解しているが、録音記録の中では自分の意見を述べていない学習者たち。第3に、自分の読み方が確立されており、文章理解の結果の面でもすぐれた成果を示した学習者、である。



第1のタイプは、「考えながら読んでいる」ことがよくわかるのであるが、第2のタイプも単に受け身の理解にとどまっているのではなく、面接の中では明瞭に自分の意見を述べていた。その他、2年生の第3のタイプおよび上級生も含めて、このランクの全員が「考えながら読む」こともしているのが感じられた。

ここで、特に取り上げておきたいのは、第3のタイプに属する《05》の学習者の読み方、読解ストラテジーの行使の実態である。

#### 【《05》の学習者の読み方の特徴】

##### 1. [録音記録] について

特徴的なことは、各区切りで内容の説明に入る前にその部分の目的、つまり、その部分で著者が何をしようとしているかを明示していることである。例えば、録音記録の〔2〕の区切りでは初めに「間宏氏の見解を紹介している」と述べ、終わりに「著者は疑問を感じ始めている」とまとめている。

全体として文章の内容を明確に要領よくまとめたものになっている。特に、著者がどのように間宏氏の見解を批判しようとしているかが、きちんと整理されている。

##### 2. [アンケート] の回答内容について

「専門書の読み方の工夫」という質問に学習者自身は次のように答えている。

1. 重要な箇所にアンダーライン、わからない言葉に印をつける。
2. なるべく辞書を引かず、速く読んで全体像をつかむようにする。
3. 重要な中心部分をじっくり読む。重要でない部分に目を通すだけ。

この学習者の場合、「3」が特徴的であると思われる。その読解ストラテジーは「1」の作業をとめないながら行使されるわけである。したがって、「3」の重要度を区別する判断の結果は、下線箇所の分布状況によく反映されると言える。

##### 3. [下線箇所の分析] から

- ① トップダウンの読解ストラテジーの行使を明瞭に示すような下線の引き方がなされている。特に、ディスコース・マーカ一文を重視しているのが感じられる。
- ② 下線の箇所は、全体的にはあまり多くない。重要度の高い部分にのみ下線を引いている。また、キーワードだけを示せば何が書いてあるかわかるような場合は、その語句だけに下線を引いている。
- ③ 未知の専門用語に関しては、意味の理解の手掛かりとなる箇所に適確に下線を引いている。「語義の推測」という読解ストラテジーも発達していることがうかがえる。

- ④ もう1つ特徴的なのは、文章のところどころに、ある文とか部分の「機能」を明示するような書き込みをしていることである。(例えば、「～と作者は指摘している」、「～を紹介した」など。)その他に、文と文、部分と部分の関係を明示するための書き込みも見られた。このことから、「文章の修辭的構造を意識して読む」ストラテジーが行使されていることがわかる。

次に、このランクの上級生3人の読み方について。彼らにも共通した特徴が見られるのであるが、それは、内容を説明するにあたっては、文章に含まれる論理展開を把握した上で、これを「論理的に再構成」して見せていることである。その結果は《09》のように適確なまとめになっている場合と、《11》のように部分的に変形も加わったまとめになっている場合が見られた。しかし、いずれにしても、「読み手」の側の主体性がはっきり感じられるような読み方であるという面は共通していると言える。

もう1つ共通しているのは、専門分野で蓄積してきた知識を利用しながら読んでいることである。問題文章のテーマについても具体的知識があるという自信があるためか、2年生たちと比べて、より自由な態度でテキストを読んでいるのが感じられた。このグループの中で、特徴的な読解ストラテジーを持つ個人としては、《09》の学習者を見ておくべきだと思われる。

#### 【《09》の学習者の読み方の特徴】

##### 1. 【録音記録】について

この学習者の場合も、各区切りの初めや終わりに、著者の意図や主な内容を予告する言葉が述べられている。

全体として、著者の論理展開を整理してまとめ、わかりやすく提示したものになっている。間宏氏の見解と著者の批判という関係の枠組みもよくわかる。

##### 2. 【アンケート】の回答内容について

「読み方の工夫」という項目には「段落の要点を余白にメモしながら読んでいく」と記入している。

「解決行動」という項目には「g. (文章の論理展開がつかみにくい) → 理論的な組み立てを記す」と記入している。

今回の文章を読むにあたっては、後者の手段を実行しており、【行動記録】には次のようなメモが記されていた。

#### 【1】 まず、問題提起した

- a) いままでの流れ
- b) 定義 (伝統、制度、手法)

- c) 機能と役割について (管理制度, 手法, 慣行)
- [2] 各理論について
- (1) 間宏氏 i) 変容 (変わったが, 日本的な価値観を持つ)
- (以下, 省略)

これらの回答, 記録からわかることは, この学習者の場合, 文章構成を分析, 整理した読書ノートを取りながら読む習慣があるということである。

この読解ストラテジーは, 文章内容を正確に読み取ることと, テキストを客観的な見方で批判的に読むことの両面に役立っていると思われる。面接時のやりとりでは後者の面が感じられたのであるが, そこでは, 学習者は「植村氏自身が日本的経営はどのようなものだと考えているか。具体的に示してほしい。」と批判的な意見を述べていた。

### 6.2.2 B ランクの学習者について

A ランクの場合は, 読解ストラテジー行使の面で共通点が見られたが, このランクでは, 全員に共通した特徴は見られない。

その原因は, 例えば「読解ストラテジーは発達しているが, 読解スキルがやや劣る」学習者と「読解スキルは優れているが, 読解ストラテジーは不十分」な学習者が, 文章理解の結果の評価においては, 同ランクに位置付けられることになったためだと思われる。

ここでも, まず, トップダウンの読解ストラテジーの行使の面の分布状況を見ておくことにする。

表8 B ランクの学習者の「トップダウン」の行使状況

| トップダウンの行使程度 | 学 習 者 番 号      | 合計人数 |
|-------------|----------------|------|
| 積極的         | 03, 04         | 2 人  |
| 中程度         | 15, 17, 21, 22 | 4 人  |
| 消極的         | 20             | 1 人  |
| 不 明         | 14             | 1 人  |

このランクの2年生は6人で, 読み方と文章理解の結果という面から見ると, 3つのタイプに分けることができる。第1は, 読解ストラテジーを行使して文章理解に努めているが, 読解スキルが未発達で, 各部分については十分理

解できなかった学習者たち。第2は、各部分の要点は正確につかんでいるが、読解ストラテジーの面に問題があり、全体の枠組みがあいまいになっている学習者たち。第3は、自分なりに整理して理解しようとしているが、部分的には変形も見られた学習者たち、である。

第1のタイプは、アンケートの中でも、自分の読み方の工夫について具体的に記述しており、読解ストラテジーの発達した学習者であることがうかがえる。しかし、今回の文章を理解するにはかなり苦労したようで、《03》の学習者は面接で「大変難しい」と感想を述べている。その困難化の要因としては、「単語の意味」、「慣用句など」、「専門用語」、「意味がわからない文」、「読むのに時間がかかり、全体像がつかめない」などの他、知識レベルの諸要因をあげている。《04》の学習者にも同様な傾向が見られた。こうしたデータから見て、この2人は、読解スキルの面での発達が不十分なために、文章が「大変難しく」感じられたことがわかる。

しかし、トップダウンなどの読解ストラテジーを行使しながら読んでいるため、文章理解の結果では変形が見られず、そのアウトラインと主な内容がつかめたことを示すものになっている。読解ストラテジーの共通点は、トップダウンのストラテジーをよく行使していること、内容の要点や重要な事柄を余白にメモしながら読んでいることである。その他に、《03》の学習者は「音読する」こと、《04》の学習者は「矢印などでわかりやすく整理する」ことなど、それぞれ、独自の読解ストラテジーを実行していた。このように、2人とも、読解ストラテジーの行使に熱心な学習者であることがわかる。

第2のタイプは、逆に、読解スキルの面ではかなり発達している学習者たちである。ふだんの読解授業や、試験の結果からも、彼らは「正確に読む」力が優れていることがわかっていた。一方、読解ストラテジーの面はどうかと言うと、今回の録音記録などの分析から多少問題を感じる点があった。

読解ストラテジーの面で《17》、《21》の学習者に共通しているのは、トップダウンのストラテジーの不十分さである。下線箇所の分析を見ると、2人とも、間宏氏の学説の要約部分に多く下線を引き、著者のコメント、批判の部分にはあまり引いていない。これは、全体の関係の枠組みをしっかりと意識しながら読んではいないことを意味する。また、《21》の学習者はディスコース・マーカー文に全く下線を引かず、《17》の学習者もディスコース・マーカーや、「論点」への下線引きが少ない。さらに、アンケートの回答内容からも

《21》の学習者の読み方の特徴がわかるのであるが、それは各部分を正確に把握することから始めて、段階的に全体に至るという、典型的にボトムアップ的な傾向を示していることである。

【《21》の学習者のアンケート回答から】

「専門書を読むとき、工夫し、実行していること」

- ① 重要な箇所にアンダーラインを引く。
- ② 段落の要点をメモしながら読んでいく。
- ③ 一つ一つ段落の内容をまとめる。すこし感想と意見を書く。
- ④ 内容について他の教科書と比較する。わかりやすくまとめる。

こうした読み方のスタイルは、今回の文章理解の結果にも反映されていると言える。というのは、2人とも各部分の要点は正確につかんでいるが、文章全体の枠組みはあいまいになっており、特に、間宏氏の見解と著者の考え方が分離されず、融合してしまうという欠点も見られるからである。

第3のタイプについては、特徴だけを簡単に記述しておくにとどめる。このグループの学習者たちの録音記録に見られる共通点は、文章内容を自分なりに整理して、理解し、説明する傾向が見られることである。その意味で、Aランクの上級生たちの「論理的に再構成」してみる読み方と似た面があると言える。しかし、上級生たちほどには読解スキルも読解ストラテジーも発達していないために、文章理解の結果はやや劣るものになったと考えられる。

Bランクの上級生は2人であるが、読み方には1つの共通点が見られた。それは、細部の分かりにくい所には読解の努力を注がず、重要な所だけをおさえて読んでいくというスタイルをとっていることである。その意味で、スキミング的な読解ストラテジーが行使されていると言える。読解スキルの面では、Aランクの上級生たちと比べればやや劣ると感じられた。ここでは、4年生の《14》の学習者の読み方を詳しく見ておくことにする。

【《14》の学習者の読み方の特徴】

1. 【録音記録】から

特徴的なことは、不明箇所をはっきり特定して示していることである。例えば、[1]の論点2については「どういうために書いてあるか、ちょっとわからなかった。」と述べている。

そして、1つの区切りが全体的によくわからない場合は、著者の言いたいこと

を読みとろうとする。[3]で学習者は、文章内容がよくわからなかったことを率直に述べながら「私が理解したのは、経営家族主義が崩壊したことを作者が否定しているように見えた。」と、この部分の要旨を指摘している。

また、単に内容を要約するだけではなく、自分の知識を用いて補足説明している箇所もあった。その説明は適切なものであった。

全体的にも、間宏氏の見解と著者の考えの相違点など、関係の枠組みは適確に把握されていた。

## 2. [アンケート]の回答内容について

「読み方の工夫」という項目には、読解ストラテジーのかわりに学習ストラテジーが記入されていた。その内容は「日経の社説をノートに書き写す。」というものであった。自分で読解スキルを高める努力をしているのがわかる。

「解決行動」の項目には、a「漢字の読み」に対して「漢和辞典」と記入していた。非漢字圏の学習者の苦勞がうかがえる。

### 6.2.3 Cランクの学習者について

このランクの学習者たちの場合、録音記録や面接結果から見て、その文章理解にはかなり多くの問題点が見られた。主な問題点としては、原文の内容をかなりの程度変形した説明になっていること、および、著者の考えと間宏氏の見解が区別されず、最終的には融合してしまっていること、の2つがある。特に前者の問題点はこのランクの全員に共通して見られたものである。

しかし、読解ストラテジーの面では、ここでも全員に共通する特徴は見られない。ただ、割合としては、読解ストラテジーの行使、特にトップダウンのストラテジーが不十分な学習者が多いという傾向が見られる。このランクの学習者のトップダウンのストラテジー行使状況は以下の表9に示すとおりである。

表9 Cランクの学習者の「トップダウン」の行使状況

| トップダウンの行使 | 学 習 者 番 号          | 合計人数 |
|-----------|--------------------|------|
| 積極的       | 08                 | 1人   |
| 中程度       | 13, 16, 18, 19, 30 | 5人   |
| 消極的       | 23                 | 1人   |
| 不 明       | 31                 | 1人   |

このランクの2年生は6人で、読み方の面から見ると、2つのタイプに分けられる。第1は、読解ストラテジーをある程度行使しているが、各部分の論理

展開がよく理解できず、文章理解の結果に「融合」「変形」が生じた学習者たち。第2は、スキミング的なストラテジーのみを行使して、要点のみを把握していく読み方をしているが、全体の枠組みの捉え方があいまいなために、文章理解の結果に「融合」が生じた学習者、である。

第1のタイプは、Bランクの第1のタイプと共通点が見られる。というのは、両者ともに、読解ストラテジーの行使に積極的な姿勢を持っていることと、読解スキルの不十分さのために各部分の論理展開をつかみきれなかったことがうかがえるからである。

しかし、行使された読解ストラテジーの内容を見ると、Bランクの第1タイプとは差異があることがわかる。それは、このグループの学習者たちが行使しているトップダウンのストラテジーが、文章の全体像を捉える上で十分なものではなく、何らかの欠点を示しているということである。例えば《13》《16》の学習者たちは、「論点」には下線を引いているが、ディスコース・マーカールにはほとんど引いていない。

一方、各部分の文章理解に苦労したという点は、Bランクの第1タイプと変わらず、《13》の学習者は面接で「なかなか難しいから、理解良くとれなかったんです。」と感想を述べている。

したがって、このグループの学習者たちの場合、読解ストラテジーの内容に何らかの問題点があることと、読解スキルの未発達という2つの原因が重なる中で、文章理解においては「融合」「変形」という結果になったものと思われる。

第2のタイプは、「スキミング」的な読み方という点で、Bランクの上級生たちと共通している。この《23》の学習者の読み方は、文章理解の努力という面では明らかに「省エネ」的であり、著者の議論展開の細部などにはあまり注意を払っていないようである。その結果、文章の主な内容の説明においては、混乱や変形はあまり見られない。しかし、決定的な問題はそれが間宏氏の見解を中心にしたものになり、著者の批判もその中に融合、吸収されてしまったことである。

そうなった原因は、この場合も、読解ストラテジーの不十分さにあると思われる。この学習者の下線箇所の分布状況からは、トップダウンのストラテジーの行使は全くうかがえない。「論点」も、ディスコース・マーカール文も、著者の批判、コメント部分も下線引きの対象にはなっていない。ただ、間宏氏の見

解を紹介、説明している部分だけに下線が引かれており、これは録音記録の文章内容の説明と一致していると言える。

したがって、この学習者の場合、関係の枠組みをおさえながらその中でスキミングのストラテジーを行使していく読み方にはなっていないと言えるわけで、それがBランクの上級生たちとの主な相違点であると思われる。

次に、Cランクの上級生は2人であるが、読み方の面ではそれぞれ異なる特徴を示していた。すなわち、《19》の学習者は「考えながら読む」というタイプであり、《18》の学習者は「スキミング」的な読み方をするタイプなのである。ここでは、前者についてのみ簡単に読解ストラテジーの内容を見ておくことにする。

《19》の学習者は、読解ストラテジーの行使に積極的であるが、その内容は大きく「批判的読み」に偏ったものである。行動記録でも初めに「自分で考えていることをやっぺいこうと思っている」と書いているし、録音記録でも各部分で自分の意見を述べている。多くの場合、間宏氏の見解に対して自分の意見を対置するという展開になっているが、自分の考えを述べるのに熱心なあまり、対象となった文章の理解という面ではあいまいで、全体像も歪んだものになっている。

#### 6.2.4 Dランクの学習者について

このランクの学習者たちの場合、Cランクと同様に、文章理解における「変形」「融合」が見られたが、その程度はより著しいものになっている。

読解ストラテジーの面では、かなり問題点がある学習者が多く、特にトップダウンのストラテジーの欠如または不十分さの目立つ例が見られる。トップダウンのストラテジーの行使状況をまとめてみると、表10のようになった。

表10 Dランクの学習者たちの「トップダウン」の行使状況

| トップダウンの行使 | 学 習 者 番 号  | 合計人数 |
|-----------|------------|------|
| 積極的       |            | 0    |
| 中程度       | 12, 27     | 2人   |
| 消極的       | 24, 26, 29 | 3人   |
| 不 明       | 25, 28     | 2人   |



このランクの2年生は6人で、その中には3つのタイプが見られる。第1は、読解ストラテジーも読解スキルも未発達で、解読の努力はしたものの、文章理解においては「融合」と「混乱」の結果に終わっている学習者たち。第2は、スキミング的なストラテジーを行使しているが、「融合」と「変形」が著しい結果になっている学習者たち。第3は、各部分で自分の考えを述べているが、文章理解の結果には大きな歪みが見られる学習者、である。

ここでは第1のタイプに限定して、それぞれの学習者の読み方に、どのような問題点があるのかを見ていくことにしたい。

まず、《24》の学習者の場合は、読解ストラテジーと読解スキルがともに未発達であると感じられた。アンケートの読解ストラテジーを問う項目では、「わからない単語は、周りの文章をよく読み、その意味を想像する」とだけ記入している。また、下線箇所分析でも、「論点」、ディスコース・マーカー文などには全然注目していないことがわかる。一方、行動記録を見ると、各部分において「何回も読みなおした」とあり、文章の論理展開をつかむのに苦労したことがうかがえる。そして、「理解できるようになった」というのであるが、その内容の説明にはかなりの変形が見られた。《28》の学習者の場合は、読解スキルの未発達が大きな障害になったようである。この点について、学習者自身が録音記録の中で次のように述べている。

【《28》の学習者の録音記録から】

【2】〈注.【2】は第2の区切り〉

今、【2】の半分以上、読み終わっているところで、後ろの部分は「日本の経営」の戦前と戦後についての背景を説明されて、私は本当によくわかりません。特に、文章の難しさ、あと漢字の意味です。……日本語の文章わかるまでに十分時間がかかると思います。

このように、テキストの難しさと、学習者自身の読解能力の不足、さらに具体的知識の欠如があいまって、文章理解を著しく困難にしたことがわかる。読解ストラテジーの面では、アンケートなどからトップダウンのストラテジーへの志向がうかがえるのであるが、下線引きをしていなかったのも、どの程度行使していたかは不明である。《26》の学習者も、ある程度、読解ストラテジーを用いて読む姿勢はあるのだが、実際には《28》の学習者と同様に、読解ストラテジーも読解スキルも未発達であるために、「ほとんど理解できない」と自ら

認めるような結果に終わっている。

このランクの上級生は1人であるが、読み方の面では「考えながら読む」ことに偏っているという特徴が見られた。アンケートの回答では、「文章の前と後をさきに読んでから中間を読む。必要な章だけ読む。」と書いている。このように、自分の読解ストラテジーは持っていること、そして、かなり自由な読み方をするタイプであることがわかる。録音記録では自分の知識を用いて補足説明したりしているのだが、随所で著者の言っていることを変形しているのが感じられた。

### 6.2.5 学習者たちの読解ストラテジーの行使実態についてのまとめ

以上のように、録音記録分析、下線箇所分析などのデータによって各学習者の読み方を観察することにより、留学生たちの専門書読解の実態が具体的な形で浮かび上がってきた。同時に、専門書を読む能力を高めるためには、どのような面の基礎能力を伸ばす必要があるのか、何が大切なのかも見えてきたと思う。

まず、2年生たちの実態について。読解ストラテジーの面について言うと、独自の読み方を確立している個人から、著しく未発達な個人まで、個人差の大きいことが感じられた。その中間には、それぞれ何らかの形で読解ストラテジーを行使している学習者たちがいるのだが、その中にはトップダウン志向、ボトムアップ志向、スキミング志向などのいくつかのタイプが見られた。次に読解スキルの面でも個人差が目立った。そして、この学年では、読解スキルの諸要素も、文章理解の困難化要因として大きく作用する場合があることがわかった。

これに対して、上級生の場合は、かなり異なる様相が見られた。対象者が少なかったのも、どれだけ全体状況を反映しているかわからないが、今回の対象者に関しては次のような共通点を感じられた。1つは、自分なりの読み方を確立した、あるいは、確立しつつある学習者が多いこと。2つ目は、テキストに対して距離を置いた、主体的な読み方をする学習者が多いこと。読解ストラテジーの行使について言えば、ここでもいくつかの異なるタイプが見られた。さらに、個人によっては、読解スキルの発達が十分ではないと思われる場合もあったが、その場合もテキストの難解さによって混乱することなく、うまく処理していると感じられた。

全学年を通じて印象的だったのは、専門書読解においては読解ストラテジーというものが文章理解を進める上で重要な働きをしていることが、データの上にもはっきり現れていたことである。読解ストラテジーの発達している学習者は、今回の問題の文章理解においても優れた成果を示していた。

しかしながら、読解スキルの諸側面の発達も専門書の文章理解の能力を高める上で欠かせないことを示す事例も多数見られた。今回の調査の全体を通じて、読解ストラテジーと読解スキルという両側面の発達、さらに、必要な知識の蓄積という3つの要素が、専門書を読む能力を高めるために不可欠なものであることが確認できたと思う。その他に、各学習者の読解ストラテジーの行使実態を詳しく観察して、その問題点や有効な使い方を見たことによって、今後の教育実践の上で参考になることも多かったと感じている。

## 7. おわりに

以上のような調査結果の分析と考察の中で、留学生たちが専門書を読むとき、どんな面に困難を感じているか、また、どんな種類の読解ストラテジーをどのように行使しているかが、より具体的な形で見えてきたと感じている。しかし、それは、経営学という分野の、主として2年生たちの実態に限定されたものである。したがって今後は、他の分野、他の学年、大学院生などについても、同様な調査を実施してみたいと考えている。

### 参考文献

1. 岡崎敏雄・長友和彦 (1989) 「スキルシラバスによる読解指導」『留学生日本語教育に関する理論的・実践的研究』広島大学教育学部留学生日本語・日本語教育学科
2. 谷口すみ子 (1992) 「日本語学習者の読解過程分析」『THE LANGUAGE TEACHER』16-5
3. 保坂敏子 (1992) 「日本語の読解過程に対する学習者自身の意識について」『日本語と日本語教育』20 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
4. Carrel, P., Devine, J., and Eskey, D. (eds.) (1988) "Interactive Approaches to Second Language Reading" Cambridge University Press.
5. Dubin, F., Eskey, D., and Grave, D. (eds.) (1986) "Teaching Second Language Reading for Academic Purposes" Addison-Wesley Publishing Company.